Project	地域協働専攻　国際協働グループ
09	**サブカルチャーがもたらす地域貢献**
メンバー	[学　　生]　石川　葵羽 / 佐藤　愛音 / 佐藤　瀬名 / 瀧川　玲菜 / 直井　梨紗 / 花澤　里菜 / 盛田　めぐみ
	[担当教員]　菅原　健太

【背景】

サブカルチャーは、メインカルチャーと対比される文化であり、一部の集団を担い手とする文化でありながら、数年の間で現代社会に溶け込んでいる。また、サブカルチャーに関わりを持つ地域貢献が行われている。本プロジェクトでは、人々がサブカルチャーにどのような視点から地域貢献を含む社会的価値を見出しているのかについて明らかにすることを目指した。

【目的】

本プロジェクトの目的は、サブカルチャーとは何かについて地域貢献の要素も含めて明らかにすることであった。また、資料の収集・分析から得られた知見をもとに、函館のサブカルチャーの実態について調査し、サブカルチャーに社会的価値が付与されるプロセスを明確にすることであった。

【概要】

本プロジェクトでは、現代日本におけるサブカルチャーについての情報を収集し、「生み出した人々のビジョン」、「集まる人々のビジョン」、「人々のキャラクター」、「人々の美徳」、「サブカルチャーの社会的価値」、「社会にもたらす貢献」の項目に沿って分類し、メインカルチャーや伝統文化などと比較した。その結果、サブカルチャーの特徴として、①自由度、②SNS映え、③流行性、④親しみやすさの項目が浮上した。これらの要素を含む施設・お店でフィールドワークを行った。本活動を通して、サブカルチャーの社会的価値が見えてきた。

【プロセスと成果】

前期では、サブカルチャーの特徴を探るために、インターネットでサブカルチャーの事例を出来る限り数多く抽出した。そして、具体的に調べたサブカルチャーを「グラウンデッドセオリー」の質的分析法（戈木，2005）に沿ってコード化・分類した。分類したカテゴリーをもとに、プロパティの抽出と比較を行った。この分析により、サブカルチャーとは、伝統文化やメインカルチャーとは異なり、日常的な自分たちの価値の創造であることや、その価値を共有することで満たされるものであることが分かった。また、それを誰もがSNSで発信することができ、発信者になることができるものであった。さらに、他の文化と比べて自由度の高い文化であり、多くの人から親しまれていることも分かった。サブカルチャーに社会的価値が付与された理由については、①世俗を忘れ、熱中できるものであるため、②娯楽として癒しを与えてくれるものであるため、③それを必要とするファンが魅力を伝播したものであるため、④経済効果を生むためであると仮説を立てた。

後期では、上記の仮説を検証するために、サブカルチャーに関わる情報を得るためのフィールドワークを函館市で実施した。ミニシアター、カフェ、雑貨店、オーガニック専門店、ロシア料理店など様々なジャンルの施設・お店で行った。それぞれの場所で得たインタビューや観察データの分析から、サブカルチャーが地域貢献に繋がっている実態が得られた。さらに、本プロジェクトでは、フィールドワーク先で実際に感じたことをブログサイトである“note”で発信した。記述で魅力を伝え、サブカルチャーの発信者となることができた。

【まるたま小屋】

【シネマアイリス】

【総括と反省・今後の課題】

プロジェクトでは、前期にはインターネットから収集したサブカルチャーに関する情報をもとに、プロジェクトの目的を明確にすることができた。目的に沿って、収集したデータのカテゴリー化を実施し、サブカルチャーの特徴について理解を深めることが出来た。サブカルチャーの特徴とは、日常的な自分達の価値の創造であり、誰もが発信できるものであった。また、サブカルチャーへの関与から、SNS上の発信者となることができ、価値の創造を経験していることであった。これらの特徴にもとづき、サブカルチャーと関わりのある地域の施設・お店でフィールドワークを実施し、社会的価値が付与される要素を抽出する必要性が浮上した。

上記の課題を踏まえ、後期には、サブカルチャーと関連付くフィールドワーク先を選定し、インタビュー項目の作成を経て、フィールドワークを実施した。その結果、サブカルチャーに社会的価値が付与される要素として、①自由度の高さ、②唯一無二のこだわり、③価値の創造、④共有の欲求、⑤経済的な需要、⑥情報共有が容易な世の中に適していること、⑦独自性の追求が可能であることを見つけ出すことができた。さらに、これらの要素は、「本質的な価値」と「社会的背景に基づく価値」に分類することもできた。これらの知見は、「サブカルチャーがもたらす地域貢献」を支えており、サブカルチャーの存在を意義付けるものである。なお、フィールドワーク先で得た一部の情報に関しては、noteでのブログ発信もしている。

本プロジェクトの限界として、フィールドワークが函館市内に限られたことにある。他の地域へもフィールドワーク先の対象とし、データの比較を加えると、サブカルチャーと地域貢献の関係性について理解をより深めることができた可能性がある。例えば、サブカルチャーには、SNSが普及し、情報共有が容易になった背景から、マイノリティを許容しようとする社会の変容が関与していた面である。

今後の課題として、多くの人々に親しまれるために必要な取り組みや社会的価値が付与される経緯・プロセスをさらに明確にする必要がある。その中で、サブカルチャーがもたらす社会貢献についてさらに明らかにしていくことが求められる。

【地域からの評価】

フィールドワークを通して、本プロジェクトに協力頂いた方々の間で、自分たちがサブカルチャーに関わっているかどうかの認識に関して、違いがあることを確認した。協力者によっては、サブカルチャーについて、初めて知る機会になったという意見も得られた。

また、フィールドワーク先の協力者の方々と親睦を深めるにつれ、「一生懸命プロジェクトに取り組んでいる気持ちが伝わったので是非自分のお店を発信してほしいと思った」という言葉も頂いた。

実際に、ブログ“note”を用いてフィールドワーク先の一部の情報を発信したところ、一定数の反応を頂き、SNSのコミュニティにおいても、私たちのプロジェクトの成果を共有できた。

【謝辞】

本プロジェクトにおいて、インタビューの機会を頂いた協力者の皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。

参考文献

・戈木クレイグヒル　滋子（2005).「質的研究法ゼミナール：グラウンテッドセオリーアプローチを学ぶ」.医学書院.

【年間スケジュール】

前期	4月15日	オリエンテーション
	5月 9日	情報収集
	5月23日	↓
	5月30日	↓
	6月 6日	収集した情報の分析・体系化
	6月13日	プロパティの摘出・比較
	6月27日	↓
	7月 4日	発表準備・まとめ
	7月11日	↓
	7月25日	↓
後期	10月 6日	前期の振り返り
	10月12日	フィールドワークに向けた
	10月26日	事前学習
	11月 2日	フィールドワーク先の選定
	11月 9日	インタビュー内容作成
	11月16日	フィールドワーク
	11月30日	↓
	12月 7日	インタビュー・観察データの分析
	12月14日	↓
	12月21日	ブログ“note”の作成
	1月11日	フィールドワーク先の情報共有
	1月18日	プロジェクト全体の振り返り
	1月25日	成果発表準備